

遠い背中

石田 修大

私にとって今泉さんは新聞記者時代の先輩であり、流通経済大学教員としての先輩でもある。同じ職場で働いた期間こそ短かったが、ずっと後を追いかけて、ついに追いつかぬままの人生の先達の一人といってもいい。

昭和三十年代後半、高度成長のさなかに日本経済新聞に入社した今泉さんに遅れて、私は東京オリンピックの三年後、昭和四十二年に日経に滑り込んだ。三十年代の日経には、まだ商売人や株をやる人が読む新聞というイメージが強く、新人時代の私も事件現場で「日経ですが」と声をかけても、「サンケイさん？」と聞き返されるが多かった。社会部があるなどと思われていなかったのだ。

経済新聞という特性も幸いして、高度成長期を通じて飛躍的に発展し、「経済を中心とする総合情報機関」を豪語するようになった。いつの間にか通勤電車では誰もが手にし、接待の必要から銀座のホステスまでが連載小説を話題にするほどになっていった。

この時期、日経を成長させたのは三十年代入社先輩諸侯であり、第一線で支えていたのが、私たち四十年

代入社組にとって兄貴分にあたる今泉さんたち世代だった。

日本の新聞社では政治部や経済部を硬派と呼ぶのに対し、社会部や文化部、運動部などは軟派といわれ、軽んじられる傾向がある。特に経済中心の日経では、社会部、文化部や運動部などは紙面の割当も少なく、刺身のツマ扱いされることが少なくなかった。

だが社会部、文化部と軟派一筋の私から見ると、当時の日経には軟派に優秀な記者が少なくなかった。特に今泉さんの世代は優れた文章を書く書き手が多く、しかも積極的に仕事をこなし、口角泡を飛ばして会社の現状を愁い、将来を語る。仲間意識も強い人たちとの印象が深い。

一緒に仕事をする機会にはなかなか恵まれなかったが、私もいつか今泉さんのような文章を書きたいと思いい、記事を見つけると必ず目を通したものだ。職場でようやく席を並べるようになったのは、退社の5年前、論説委員になってからだ。運動部記者から論説委員になった今泉さんは、一面コラム「春秋」のメインライターであり、幸いなことに私も週に一、二度、「春秋」を書かせてもらえることになった。

一面コラムは社を代表する無署名のコラムであり、しかもその日のニュースや時の話題、時候などを考えて書く内容を決めねばならず、翌日の朝刊早版に間に合わせるために半日足らずで書き上げなくてはならない。テーマの選定に加え、早業が必要であり、なおかつ読者を納得させる文章が要求される。

至難の業に呻吟し、なんとか紙面に載っても、読み返してはため息をつく。わずか六百字ほどであり、それも月に十回に満たないにもかかわらず、五年間、「春秋」を書くだけで手一杯の有様だった。何の苦労もなく書いているように見える今泉さんのコラムを見ては「なるほど」と感心し、何とか追いつこうとするのだが、スイと先に行かれてしまう。

しかも、「春秋」をこなす傍ら、文化面に記事を書いたり、中国に取材に出かける。関連会社に頼まれれば、

就職を控えた学生用の「論文の書き方」を本にまとめ、社内の同好の士が集う句会にも出席し、論説主幹らと鍋研究会を立ち上げ、ホームページに投稿するという余裕である。不器用な当方など思いもつかぬ多才ぶりだ、ただ目を丸くする日々だった。

そんな今泉さんはやがて、取材をきっかけに中国古代の歴史に関心を深め、『兵馬俑と始皇帝』などの著書をまとめ、中国の大学に招かれて、教壇に立った。そのあとに引きつけられるように、私も「論文の書き方」をまとめ、病気を機に定年前に退社したあと、同僚に誘われて素人句会に顔を出すようになった。

しばし先輩の多才ぶりを忘れ、生来の怠け癖のまま怠惰な日々を送っていたが、ある日突然、今泉さんから電話を貰った。流通経済大学で現代文章論、メディア論などを教えているが、定年になるので後を引き継がないかというのである。ありがたい配慮にお引き受けしたものの、また今泉さんの背中をずっと前に見て、己の非才さを嘆く日々が始まった。

当の今泉さんは大学を退職後すぐに、仲間と俳句の普及をはかるNPO法人を立ち上げ、新たな活動を始めている。「双牛舎」と名付けた法人のホームページを眺めていたら、こんな句が載っていた。

ふるさとの砂吐いている蜆かな

言葉遊びの句会で頭でつかちな句をつくっている当方は、またもや今泉さんの背中がスーツと遠のいていく思いに打ちのめされる。

今さら追いつこうなどとは思わない。せめて背中が霞んで見えなくなるくらい遠くまで、いつまでも長生きしていただくことをお祈りするのみである。